

■かんのんまちづくりの会

桐生市は群馬県の東毛地域にあり、かつては県北地域の養蚕業と連携し、富岡、児玉、秩父、八王子、相模、を経て横浜港まで現在の JR 八高線に沿って産地のネットワークを形成していた。

しかし近年は、全国 10 万人規模（桐生市の人口は約 12 万人）の市町村の中で、人口減少率が第 4 位（上位 3 位まではいずれも産炭都市）にランキングするほど都市の空洞化に歯止めが掛からない状況である。

一方これに呼応する形で、市内では、機織り工場の近代化遺産を活かした保全・活用型のまちづくりが近年盛んに行われている。

桐生市の中心部は、江戸時代に町立てされた旧「桐生新町」であり、その北端の「本町 1 丁目」から南端の「本町 6 丁目」までにおいて、1990 年代半ばから様々なまちづくりの連鎖的運動が始まった。

例えば、1994 年に本町 2 丁目の有鄰館（近江商人の矢野倉庫群）保全運動が高まると、1999 年から糸屋通りの活性化運動、本町 1 丁目の買場紗綾市の復興運動、2000 年に本一・本二まちづくりの会設立、2006 年に桐生世界遺産の会設立などが起こった。現在は伝統的建造物保全に向けた住民運動が活発なことで知られている。

しかしながら、たとえば 2001 年「全国本町サミット」（全国で「本町」の名を有する中心市街地が集まる会議。1999 年、2000 年と小諸市で開催。）を本町 6 丁目が中心になって開催する中で、本町 1, 2 丁目に参加しないなど、これまでそれぞれの運動の孤立や排他性が目立った。

そのような背景の中で、2007 年、本町 6 丁目で「かんのんまちづくりの会」が誕生すると、それまでばらばらだった（本町 1, 2 丁目も含め）諸運動体が連帯に向けて動き出した。

「かんのん」とはもともと浄運寺（江戸期に桐生新町と同時に設立された寺）において毎月 18 日に行われていた車座の会「夜観音」からとったものであり、今では檀家に限らず、市民や市外のサポーターなども参加し、毎月 18 日の夜に開催されている。

この「かんのんまちづくりの会」に、「本一・本二まちづくりの会」や「桐生世界遺産の会」をはじめ、かつての町割の北端の要にあたる「天満宮」と南端の要の「浄運寺」が呼応して立ち上がったことにより、北端と南端からまちづくりを浸透させるといったシンボルになり、連帯的な運動に加速をかけている。

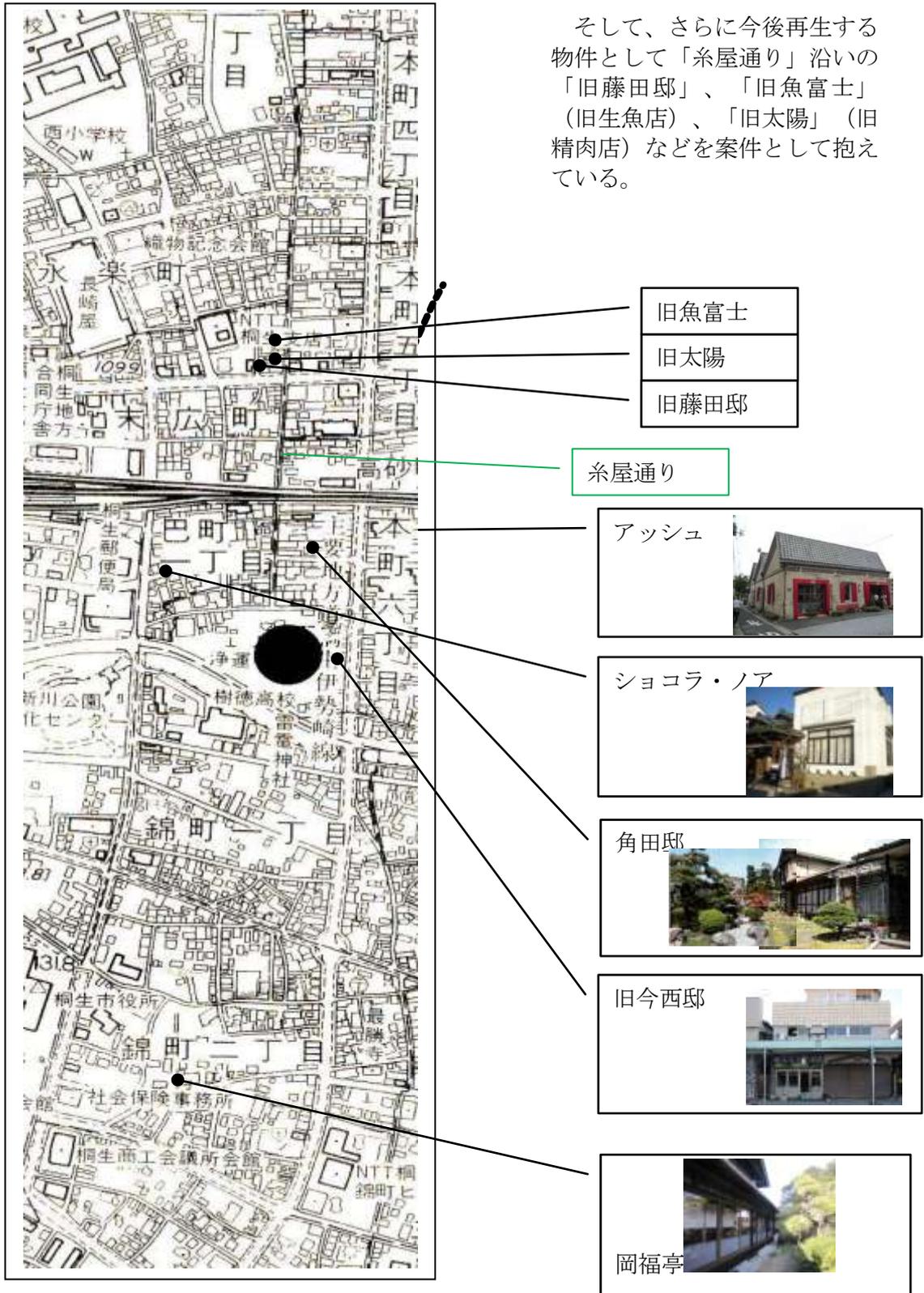
図 1 桐生市の位置



■古民家再生活動

本候補者は、かんのんまちづくりの会が設立する前から古民家再生活動を始めていた（例えば「アッシュ」2000年再生）が、同会に所属してからより本格的に活動を推進し、2008年には、古民家をカフェレストランに再生した「ショコラ・ノア」を、また、かんのんまちづくりの会が3年経って、組織的な改変を経た新体制のもとで、現在も「角田邸」「岡福亭」「旧今西邸」を手がけている。

図2 古民家再生物件（案件）の位置



<鋸屋根工場を美容院（アッシュ）にコンバージョンした事例>

アッシュ・ヘア・メイク  
桐生市巴町一丁目1126



玄関



路地側



店内

1935年頃に建てられた（桁行6間半・梁間10間の石造平屋建で3連の鋸屋根を持つ）工場（旧堀祐織物工場）。その後は倉庫として使用され、2000年には内装・戸口・屋根が改修され、転用（コンバージョン）されました。外壁は大谷石の切石整層積で、南面に当初の戸口を遺構として残しています。

大谷石のノコギリ屋根工場を活用した美容室であり、ノコギリ屋根の活用という点で先駆的な存在の一つで、とてもおしゃれで、雑誌などにも数多く取り上げられています。その外観だけでなく美容師さんたちの仕事ぶりも丁寧で地元では非常に人気のある店です。また、そうした仕事ぶりを教えてもらおうと、県内外の若者たちからの問い合わせの多い店でもあります。

<古民家をカフェレストラン（ショコラ・ノア）にコンバージョンした事例>

ショコラ・ノア  
桐生市巴町一丁目1117-1



店内（洋館）



店内（広間）



広間の天井（桐生錦）

桐生市の織物業の創始者の一人でありまた桐生の堀マラソンで知られる「堀祐平」が昭和2年に建てた築83年の和洋折衷住宅で、その後も縁のある方が住宅として使用していました。

居室の一部を洋館に仕立てるのは、当時の桐生市の流行でもありました。平成20年に改修され欧風料理と創作デザートのお店として転用されましたが、当時のカーテンや装飾具や家具などをできるだけ残しています。

野外造形物をあしらった中庭、フローリングを施した中央の和室には桐生の織物を取り入れるなど空間演出にもこだわっています。連日多くの女性客で賑わう名店で、予約を取るのが難しいことでも知られています。

図4 かのんまちづくりの会 2010年以降の体制で抱えている古民家再生案件

<p><b>岡田邸(岡福亭)</b></p> 	<p><b>角田邸</b></p> 	<p><b>旧今西邸</b></p> 
<p>3月会議、岡田から提議</p>	<p>会設立当初からの案件</p>	<p>3月会議、住職から提議</p>
<p>8月：工場取壊案→12月保存案</p>	<p>デイケア+ショートステイ案の練直し</p>	<p>7月：取壊意向→10月：再生案→12月： 現案(インキュベーション・ショップ)</p>
<p>土地：岡田 建物：岡田</p>	<p>土地：角田 建物：角田</p>	<p>土地：寺 建物：寺へ譲渡</p>
<p><b>旧魚富士</b></p> 	<p><b>旧太陽</b></p> 	<p><b>旧藤田邸</b></p> 
<p>土地：寺 建物：寺へ譲渡</p>	<p>土地：寺 建物：寺へ譲渡</p>	<p>土地：寺 建物：寺へ譲渡</p>
<p>6月会議、住職から提議</p>	<p>6月会議、住職から提議</p>	<p>6月会議、住職から提議</p>

岡福亭は鋸屋根工場と隣接した民家で、現在でもオーナーが居住しているが、広間を使って5年ほど前から、コンサートや甘味処として不定期に利用されていた。かのんまちづくりの会では、この鋸屋根工場の活用（取り壊すべきかどうかも含めて）を考えることになった。当初は取り壊す案も出ていたが、昨年11月にかのんまちづくりの会のメンバー（東京から研修に来ている女性）が半月ほど滞在するようになってから、芸術家にアトリエとして貸し出すなどの案も出てきており、現在も保全する方向で検討中である。

角田邸は、かのんまちづくりの会が設立した当初からの案件で、現在でもオーナーが居住しているが、新居を建てて引っ越すことも含めて、利活用を考えることになった。当初は高齢者のデイケアとショートステイを機能として考えていたが、近隣に同様な機能が立地したこともあって、より積極的に地域に関わるような施設（例えば子育て支援など）を検討することになり、現在も協議中である。

今西邸は、かのんまちづくりの会の発起人であり中心人物である寺の住職がその土地を所有していたが、建物住民が引っ越すことを受けて昨年3月頃より、空き家となった後の利活用を考えることになった。当初は取り壊す案も出ていたが、昨年12月頃から多目的なコミュニケーションセンター（来街者への職・住のあっせん、観光案内、SNSの発信拠点などの複合体）として利活用する方向に決まり、現在はかのんまちづくりの会のメンバーが館主として住み込んでいる。

なお、他の物件（旧魚富士、旧太陽、旧藤田邸）はまだ構想中の段階である。

## ■新たなコミュニティづくり

### <ガーデニング事業>

かんのんまちづくりの会が設立された当初から「ガーデニング班（その後、部会）」として活動してきた。具体的には各商店や事業所のセミパブリックスペースに、季節ごとに花植えのプランターを配布する事業であり、地域の住民、子どもたちを巻き込んで行っている。

ガーデニング事業は単に地域の緑化を増進して景観やアメニティーを向上させるだけでなく、民有地と民有地の間を管理（マネージメント）することがモラル上ないしは友愛（連帯）の精神から公益であるという、「共生（ともいき）」としての自覚を実感させるという効果があった。

当初は、それは商店会や町会の仕事ではないかといった異論もあったが、最近はそうした自覚の効果が理解され、関係者は自主的に活動するようになっている。

また、景観的向上についても、メインストリートである「本町通り」の中で6丁目界隈が最もきれいだという住民の声が届くなど、着実に成果が上がっている。

かんのんまちづくりの会のメンバーとしては、景観やアメニティーの向上がコミュニティの再生につながるということが一例として検証されたとして受け止めている。



ガーデニング事業の様子



## <布祭りイベント>

これも、かんのんまちづくりの会が設立された当初から「着物・織物班（その後、部会）」として活動してきた。具体的には浄運寺の境内で、季節ごとに市内に眠る古着や布を集めて、市（いち）を開催する活動であり、古着の古物商や織物工場などを巻き込んで活動している。

古着の市としてはこの取り組みの以前から、本町1丁目界隈で「買場紗綾市」や「骨董市」、3丁目界隈で「桐生ござ座」、「糸屋通り祭り」等が開催されていたが、年々、これらと同時に開催するようになって、本町1丁目から6丁目までのにぎわいに寄与している。

布市（ぬのいち）は、単にイベントとして賑わいを提供することが目的なのではなく、民家や工場に眠っている古着や布を「もったいないからみんなのために使うべき」という公益的（モラル上ないしは友愛）精神でコミュニケーションを図っていくことが当初からの狙いであった。

初回に行った布市（2009年11月）では、かんのんまちづくりの会のメンバー全員が参加して、会員間の絆を深めたほか、市民とのふれあいを通じて、新たなコミュニティ形成に大きく寄与した。その後もアウトリーチ活動の一環として活動するようになってきている。

布市（ぬのいち）の様子



図5 布祭りの連動

